

モノを造る上で大切に考えていること 信念と表現の必要性に従って 外化させていくことの大切さ

中村 滝雄 高岡短期大学教授

感性と個性

人間は何時の時代にも「個性」という言葉を多用し、自分のライフスタイルを確立して少しでも豊かな生活を実現しようとしてきました。特に、昭和の高度成長期における中流階級意識や大量生産された製品に囲まれ、ものが溢れる生活を経た現在、創り手のみならず使い手も「個性」を追求しています。美術をはじめクリエイティブな世界において「個性」は当然と言えることが、またこ

のような世界にのみ求められていたことが、いま社会の中で、また生活の中で求められています。

では「個性」とは何でしょうか。

多くの人は「他人と違う考え」「他と違うもの」「他とは違うこと」とにかく他との比較による差異を想像し、それを目的に掲げて行動を起こしているのではないのでしょうか。例えば、ある人がAと言う作品を制作しているから、それとは異なるBを制作する。Cと言う物を身につけているから、Dを...といった具合に。しかし、それらの行為は



RELEASE 500×500×400cmH 材質：鉄 <第2回大宮野外彫刻展> 大宮市民の森

結果を意識した考えに過ぎないのではないかと思います。重要なのはその原点と過程です。

では、そのような結果を引き出すのは何でしょうか。

美術の世界では良く「感動しろ」と言われています。しかし、私達の生活は毎日同じことの繰り返しやマニュアル化したライフスタイルの中で、なかなか感動できる場面に遭遇することがありません。それは、このような環境に身を置けば忌憚がなく、危機にさらされることもないことから、社会の常識あるいは逸脱しないマニュアルに沿った行動パターンになっているからです。これらの環境は「感動」が起こる確立の少ない状況にあると言えます。いわゆるマンネリ化と言うパターンであり、「個性」を生むことができません。

「感動」や「驚き」は、日常（習慣）から少しズレた行動をとることによって、普段とは違う状況との出会いが発生し、刺激を受けて起こることだと思います。その体験こそが大切であり、他の誰とも違う情報となって体内に蓄積し、個性を構築して行くのです。したがって、自分に素直にまた正直に構築させた感性を活用すれば、自然と個性は表現されるのです。しかし、皮肉にも、常識化、日常化、マニュアル化した生活によってそれらの感性が奪い取られてしまっているのではないのでしょうか。ですから、改めていつもと視点を変えて素直にものを観る、純粹に考えることから新しい発見を取り戻す必要があります。経年による習慣から原点に帰ることによって、感動や驚きを引き起こすことになるのです。芸術家（創造者）はそれらのズレや逸脱度がやや大きいと言える人達と考えることができます。

感性と技術のバランス

私は美術大学で特に学部では伝統的な金属工芸、中でも鍛金の分野を勉強しました。銅板の手絞りから変形絞り、そしてそれらに加飾する為の彫金技法も修得したいと必死に経験を重ねました。技術を手にすれば豊富にアイデアが出現し、制作可能になると考えたからです。しかし数年後、大きな壁に遭遇することになりました。修得した



早朝 26×14×15cmH 材質：銅 技法：変形絞り



かき 8×8×7.5cmH 材質：銅、真鍮 技法：変形絞り



四分一象嵌鍍起鉢 24×24×13cmH
材質：四分一、金、銀 技法：鍍起技法

技術が自由な発想を妨げる結果になってしまったのです。つまり、持ち合わせている技術の可能な範囲内でアイデアが拘束され、展開ができなくなったのです。それでも現在まで受継がれた工芸作品のパターンを踏襲し、制作していれば問題なく継続できたと思います。しかし、自らの感性に従った作品を制作しようと奮起した時、固定観念による技術が障害になり、自由な発想も不可能になりました。

ある陶芸家は一日に五百個、同じ形の湯のみを轆轤で挽く環境から「どんな物でも挽ける技術は身についた」が、「自分は何を制作したいのか」を見失ったと言い、逆にこの「疑問によって制作する方向性が開けた」と話してくれたことがあります。つまり、高度な制作技術から良い発想ができるということではなく、自らの感性から発する「表現の必要性」が重要だと言うことだと思います。

優れた作品を制作するには、高度な技術が必ず必要になります。しかし、それは表現の必要性に

伴い、また工夫や挑戦によって得ることであり、感性と技術のバランスやその一体化が大切であると考えています。

私は上記のような時に鉄と言う素材に出会いました。一般に鉄は建材として私達の前に存在し、冷たい・重い・鋭い・硬いなどの物質性を人々に印象として与えています。それは非形態的で抽象的であり、人間に親しまれる素材ではありません。それどころか無味乾燥な抽象性は、非人間的とも言えます。しかし鍛造（火造り）の時、かつて見たことのない具体的でリアルな形態に、技術のみでは表出しない鉄の原形を発見した思いでした。鍛造行為と作意に従わないリアルな形態との一体感に、其々の自然な存在理由を見つけたのです。これは鉄が非日常化する形態との遭遇による素材の発見でした。それ以来、技術に影響されない自由な発想を展開可能にしたと思っています。そして「REVIVE」「RELEASE」「表出」「WIRE WORK」シリーズを制作して行くことになりました。



表出 40×90×155cmH 材質：鉄 <第5回現代彫刻イン穂高>

金属工芸(造形)教育から

私は金属造形作品を制作するとともに、鍛冶屋の製作技法を保存するため鍛冶師にインタビューをしています。作業場に訪問を重ねて行くうち、鍛冶師の製作行為にモノを創造する基本が存在していることを知らされました。親方から弟子への伝達方法や優れた製品の製作は、金属工芸の職人のみならず美術・工芸教育や作品制作にも相当する場面が存在するからです。

現在、日本で行われている多くの美術教育は、ある一定の方法でマニュアル化されているように思います。つまり与えられた課題は、材料をはじめ完成に至るまで全てキットになっていて、説明書のやり方を守れば作品ができてしまう。多少各人の形態は変わってそれなりの感性は育まれるとは思いますが、作者の個性は表れ難い。また指導者、生徒に完成の喜びはあるものの、物事の発見や創意工夫する力が身につかないように思います。高等教育においても授業名が「技法」になっていることが物語っています。欧米はその点自由であり、技術よりも感性やコンセプトを重視しているように思えます。例えば、モチーフを描くことを欧米ではドローイングと言い、日本語では素描と訳されています。つまり物事の「素」を描くことであり、本質を捉える感性を養えると私は解釈しています。日本では描写と言い、似ていれば良いとされている教育が技術を修得させるようになったのではないのでしょうか。

一方、職人の教育は親方が弟子に教える姿はありません。弟子はひたすら親方の行動に目を凝らし、優れた製品と自ら製作した物を照らし合わせて違いを受けとめ、自らの感性で読み取るだけです。また「口伝」と言われる言葉から、実験や工夫そして挑戦を繰り返して本質を探し求めるだけです。「勘」という言葉に表されるように、察知力と洞察力を発揮させて親方の作品に少しでも迫り、さらには超えようと新たな挑戦と努力をして技術と一体になった感性を鍛えるのです。これらの繰り返しは体験として身体に蓄積され、個性と技術になって行きます。また、多くの失敗の中に以外にも親方とは違った、非日常的なパターンと



RELEASE 20×100×210cmH
材質：鉄、コンクリート <個展> ギャラリー山口

して優れた面が現れることもあるのではないのでしょうか。それらは、次への伝統となる可能性を秘めていることもあると思います。

このように考えてみると、私達はいかに興味を持って体験を積み重ね、個性として積極的に感性を養うことの大切さを実感します。つまり、20世紀の偉大なアーティストであったパブロ・ピカソが子供の絵やプリミティブな造形に影響を受けたように、私達は純粋な気持ちで常に新しい場面と積極的に対峙し、素直に驚きを受けとめる感受性を持つこと。また、常識と言う言葉のもとで形骸化され、放棄してしまった感動する切っ掛けを、些細なズレ(非日常)から取り戻すことの重要性を認識しなければならないと思います。そして、定石から逸脱することを恐れず、信念と表現の必要性に従って外化させていくことこそ大切なのではないのでしょうか。

素描：単一色、一般に黒色の線もしくは点で、物の形象をあらわした絵。絵画の基礎となるもの。すがき。デッサン。(広辞苑から)